慶明雜録　三

雑　三
自丁卯十二月中旬
至下旬

内閣文庫
和書　類
三一四九一　號
三一　冊
一五一　函
五　架

304
7

内閣文庫		
番號	和	31491
冊數	31(3)	
函號	151	28

国立公文書館
National Archives of Japan

304
ワ

丁卯十二月中自中旬至下旬

慶明雜録

雜三

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書

慶明雑録

一十二月十一日迄之次第者大畧町便取仕立申
上置候其後十二日徳川内府公會桑同下阪右
者下々ノ処鎮撫出来兼候間万一於
闕下動乱引出候而者此上無申訳トノ事ニ而
為鎮撫致下阪早速會桑令歸國鎮撫調次第早
速上京トノ事候処其後モ却而淀伏見邉迄人
數操〔繰〕出登セ西之宮兵庫邉ニ若州固メ人數ヲ
出シ松平豊前守老中格被仰付候間前々老中

参史局

拾之通相心得候様ト於大阪小藩等江相達候
次第恭順之姿一向相見得不申右ヲ以
朝命御糺明有之度候得共第一土因紹説ニ而
尾越ハ勿論藝ハ全土論切歯之至御座候三條
卿ト長州ヲ相待候得トモイマダ左右相分不
申薩者孤立之勢ヒニ御座候堂上モ下処ハ薩
論ニ而候得共上向之処因循之姿ニ而一向埒
明不申漸々責付候而一昨廿五日尾越御下阪
相成申候夫迄之處甚六ヶ敷徳川氏ヲ只今通
ニテ

朝廷御入費ヲ為差出候様有之度トノ趣此方
ヨリハ是非御入費者領地不被召上候而者修
理ニ不叶ト頻ニ申立漸々半分相運左之旨趣
ニ御書付尾越迄相下リ申候

一辞職之儀被　聞召候而ハ前内大臣ト可称事

一政権返上ノ上ハ御用途之分領地之内取調之
上天下公論ヲ以御確定可被遊候事

一大意右之通ニ御座候日数七日ヲ限復　命之
筈夫迄御受無之候得者　朝命ヲ以罪名被
仰下筈ニ相成申候是ニ而黒白相分可申歟行

末之処ニモ小シハトハ運無可申ト歎息之至御
座候
一十二日参與被仰付候西郷大久保私三人尾ヨ
リ在國荒川善作丹羽淳太郎田中國之輔越ヨ
リ中根雪江酒井十之介毛受鹿之助土ヨリ後
藤象次郎神山左多衛福岡藤二藝ヨリ辻将曹
外不存候後日肥後ヨリ溝口孤雲津田山三郎
柳川十時摂津尾州ノ田宮如雲是ハ町奉行之
場相勤申候越ヨリ三岡八郎ニ而候十四日宮
門御固メ相開平日通相成申候外九門ハ是迄
通ニテ候右ニ付而者異國人江御布令第一
之事候間早々被仰渡候様申出候処亦々諸藩
ヨリ異論申出終ニ相運不申候無致方候間大
阪所置形付候上ト申出置其通ニ相成居申候
一伏見ニ歩兵隊等操登セ市中及乱妨候由相聞
得薩長土藝江巡邏被命廿一二日比ヨリ操出
土藝者御断申出候歩兵モ登リ来リ千人余モ
是迄ノ奉行屋敷江入込居申候當分對陣之姿
ニ而候手ヲ出候様子ハ見得不申候
一三條卿廿五日御著阪六日御入洛之賦ニ御座

候宇和島侯ハ先日着相成直ニ議定職被命事
一六日薩長土藝ノ調練於日御門前
叡覧被遊候事天氣能仕合ニ御座候
一参與被仰付候以来一日モ隙ナク朝四ツ時分
罷出候得者夜五ツ時分通例之退出暮時分退
出ハ珍敷候先日者終ニ夜明而退出候事モ有
之候如此隙ナキ物ナラハ長クハ續不申御断
申上ヨリ外無之候間小松君一日モ早ク御上
京被下度奉懇願候尤諸藩ニ異論相生シ土等
ヨリ外藩ヲ取込候勢ヒ薩ヲ孤立セシメ已ガ
欲ル所ニ落シ付ントスルノ意顕然ニ御坐候
ヨリ一日モ早ク御上京御助力無之候而者危ク
御坐候頻ニ願上候土ヨリ乾退助等引出ス策
ヲ働候得共運ヒ兼申候肥後之津田一向後ニ
立不申奇妙ナル論ヲ致居申候至斯而モ尊幕
說多ニ者困リ居申候
猶細事可申上筈候得共表通問合等ニ相成
可申ト大畧仕候先形行荒々如此御座候近
日中大阪形勢相分可申候間早々飛脚差立
申上候様可仕只今之処ニテハ何モ見當付

不申候乍序時下御伺歳暮御祝儀等取交申
上候謹言

十二月廿七日認　岩下佐次右衛門

桂右衛門様

小松帯刀様

聞合書

徳川會桑名抔下坂ニ而伏見ゟ探索中出会候処別紙
之通申越尤細書ハ別段ケ条左之通

一 徳川會ハ夜五ツ時過伏見羽街道ゟ淀ゟ出牧方筋下阪
供方多勢ニ而主従共歩行小銃ハ両ニ持参大砲ハ無之候

一 右引續旗本人数追々夜五ツ半過ゟ伏見今夜七ツ時分迄
少人数ニ而次切ゟ右同道筋致下阪候

一 若州伊豫松山勢ハ無之右引續夜七ツ時分ゟ騎馬之様人
計ニ而供方も甲冑五百人位も有之由松山も主従共
歩行之由人数も先之二小隊程中ニ主人後一小隊程先後
行軍ゟ同行様ニ無之多之由伏見ゟ出淀通行主従共
歩行大砲も有之候由小銃ハ両手ニ持参之由

一 会津勢三百人斗ニ而羽衛門之筋ゟ御甲冑ニ而人数之進大
砲五丁ニ而ハ小銃ニ而鉾打出候

一 桑名之儀ハ殿下之儀ニ而ハ不宜迄ニ而ハ取扱候徳川一列ニ而引取
之ニ付而ハ桑名ニ而ハ振之扱無之候ニ付中事ニ候

一 板倉之者殿下之儀ニ而ハ竹田御門ニ而長柄等持参之者ハ抜鎗ニ候

一 会津藩七八人ニ而鉄砲持参ニ而御所之前へ参り所ニ而御固之中付候得
ハ御所之中埒明不申候

一 其時ニ薩摩百人斗御所筋殿下之内諸馬十八人程ニ候

一 梅宗方ニ殿下梅宗大助ニ而羽御門ニ而御固メ候方ニ而ハ
ニ而掛役人ニ而鉄砲ニ而持参ニ而御所ニ而ハ之事ニ而御固メ候

一 会津ハ御所之御門も固メ之
之通御所ニ而梅宗ニ而御固メ御所中出入之中止メ

徳川内府従前御委任大政返上将軍職辞退之両條
今般断然被聞食候 抑癸丑以来未曽有之國難
先帝頻年被悩
宸襟候御次第衆庶之所知候依之被決
叡慮
王政復古國威挽回之御基被為立
候間不論既往更始一新自今摂関幕府等廃
絶即今先假ニ總裁議定参與之三職を被置万
機可被行諸事
神武創業始ニ原キ搢紳武弁堂上地下之別なく至當公
議ヲ竭シ天下ト休戚を同く可被遊
叡慮ニ付各勉励旧来驕惰之汚習ヲ洗

一 皇國之為忠誠ヲ以テ盡シ候事

一 内覧　勅問御人數　國事御用掛　議奏　武家傳奏　守護職　所司代　總テ被廢候事

一 太政官始追々可被興候間其旨可心得居候事

一 朝廷禮式追々御改正可被為在候得共先攝籙門流被止候事

一 舊弊御一洗ニ付言路被洞開候間見込有之向ハ不拘貴賤無忌憚可致　獻言且人材登庸第一之御急務ニ候故心當之人有之候ハヽ早々可有言上候事

一 近年物價格別騰貴如何共不可為勢富者ハ益富ヲ累ネ貧益窘（クルシム）急ニ至リ候趣畢竟政令不正ヨリ所致民ハ王者大宝百事　御一新之折柄旁被悩　宸襟候知謀遠識救弊之策有之候ハヽ無誰彼可申出候事

右之通御確定被　仰出候ニ付而者六十余州之大小藩ハ申ニ不及陪従吏卒之末ニ至ル迄御趣意厚相心得候様御沙汰候事

一 御書附寫　一通
　但德川内府大政返上将軍職辞退
　朝政御一新ニ付見込言上等之儀

右昨十四日巳之刻　太守様江御参　内之旨御

達有之候処御所労ニ付御断被 御上京然処為御名代
其人ニ可致与奉存候共被仰付不及旨御呼出ニ付御使番高木
御達ニ付私共差出候処諸藩早参之者共ニ而鶴之
間ニ着座仕候処正親町三条前大納言様万里小
路右大辨宰相様橋本少将様頭之間ニ御列
席御書付を以御達御座候仕拝見之上写取致返上候
右之通私共勤中ニ而有之候段申上候以上
卯十二月十五日　新納喜藤次
佐次右衛門様

此節世上物騒
朝廷御警衛之折柄洛中市中巡邏追補之ニは
為蒙 御依頼候ニ付而者一御國者之義於私方都
而とも等閑之私方無之様謹慎之厘不厳候得者
此上万一海辺ニ而来士等以之外之事有之候ニ付而も
可有之無之候得者下々ニ至迄以之外之事謹慎いたし候
致候又ハ其人ニおゐて厳重ニ申付候此上万一於私方
不法之趣方ニ而も有之候ハゝ此上厳科ニ而も行ハ折々ニ申付
おゐて儀ハ追而仰付奉願候得者帝王謹様之御大任
之ニ為蒙 仰付候未尚又御手元ニ而取締方ニ付

幸之方ニ一本ニ而者素ゟ遠ニ而しらる嶋与実海
幸以来代ゟ向ニ而ハ浅根有之ニ致通路有

十二月　伊勢

十二月十八日

尾張大納言

頃日被仰含候筋ニ付限ニ乍力ニ延華城往反
被免難有次第ニ候自身ニ於ても死生ニ不顧ニ竭
御趣意御徹底ニ至候志願ニ御座候而者不届候海
叡慮を始被出精候處仰拙神祐ニ
思召候ニ通詞御付候但去九日以来日ニ相應義
ニ相偏尾越周旋ニ而座不拳ニ故ニ付氏
上ニ来ん廿五日中ニ三月を限り成功不致候ハヽ右
期日ニ至り候迄ニ而も無く迂延之義被申出候ハヽ
可申様

朝廷御情決ニ而不行件ニも可有之候ニ付前件之通
深以精々尽力ニ相勤候様仕度
一 勢ニ至リ候而ハ最早別段之通リ候 御出ニ相成候様
古今之御目今偏ニ御為的目ト存候儀ハ尾越周旋従川
内府言上之廉成否ニ不拘候而も各々一心ニ相成候而
並海外各国御布令之事ニ於而ハ迅速御発表
不被成御確定之上ハ之言上之向ニも有之与可申
之御実ニ者相立候 越土芸始下参与共之半説己
建言之次第ニも情実も無雑作止候 思召之方より也
日ヲ限ト之御発表ニ相成候 此段為心得御付置

尾州侯御願書

一 謹而御請奉申上候 臣慶勝不肖ヲ顧ス御請仕候御趣意之御徹底仕兼
鄙誠我相尽度奉願候処
勅許難有仕合奉存候 然処臣慶勝等周旋之廉ヲ挙
故ニ此上ハ来ル廿五日中二日ヲ限成功可仕旨
勅意ヲ蒙リ謹而以恐懼之至奉存候 然ル於臣職者多人数之儀ニ付道程往反之時刻も有之御刻日之数ニ而ハ可奏成功与申者難届
一二説諭仕候而も一言ニ而ハ難行届奉存候 臣慶勝熟考
仕候ニ今般
皇御維新ニ為朝政御一新之御趣意ニ而為有之候而者不動干戈天下
之蒼生将其所ヲ得候運与存時日遷延仕候共
天意ニ相叶候儀与奉存候 可相成年日数ニ無迅速之儀者別段之

天恩伏以 御許容ニ被成下候様偏ニ奉懇願候臣慶勝
不堪呼
天闕哀訴之誠恐誠惶頓首

十二月廿三日

大納言慶勝

御一新御變革ニ付而者従来
叡慮遵奉之次第茂有之旁以御下問之儀被為在候
間早々上京可有之更被 仰出候事
但應召修理大夫ヽ早速上京ニ者候得共尚又
思召之旨ヽ有之本文之通
御沙汰候事

島津大隅守

御書付 一通
但 御變革ニ付
中将様御召之儀
参與御用掛
橋本安藝
羽倉肥前

右之御用之儀ニ付只今差出候人別之切紙差
来候ニ付、右両人呼出候處、以之付市中見廻り方
右之通私共より申渡候、当番付役并武橋二お勤中ニ付
別紙之添、此段申上候 以上

子十二月十八日

伊勢様

内田仲之助

薩州

一 此節御華御混雑之處ニ乗し悪徒横行之
聞有之ニ付、御市中御見廻り之儀、此
御付候 但見廻り町奉行向之義、力ニ当り候
一 度 少将殿ニ而 山城國中在辺ニ付候、兼而当番
一 青山左京亮 松平図書頭 市中見廻り之付候文
市中見廻り之儀、次第ニ因 亀井隠岐守 加藤左京亮
加藤能登守 小出伊勢守 松浦肥前守 植村駿河守
一 六郷ニ而付候、真田之文 加賀守 中川修理 御市中
御見廻り申付候 此段申付置候、在之候ニ付申達候

右之通私共より申渡候
十二月 御付候 此段 申上候

一 別紙之通被仰付候　作法ニ付而ハ左之通心得可申候

一 救援之者共之内より一日ニ付二度巡邏可致、勤ハ非常之
二小隊ハ御屋敷等ニ止り、九ツ内之者共ニ救援之付候而
可被申候

一 宮方等制札を掛候分ニ付而ハ不敬之向を
不穏ニ存候間、巡邏之節ハ右場ニ休息等致間敷候

一 東寺又ハ浄華院寺陣之儀も当番之内出候ハヽ
致 巡邏候とも不苦候

一 集被休息等いたし右相図之太鼓喇叭又ハ口令之節も
散乱不苦候

一 通行休息いたし候而不法之仕方隊中無之様いたし、
若ハ下賤之者ニ対し威を以清く振舞
之儀堅く可相守候

一 休息之場所ニ而茶烟等呑候ものも有之候て堅く可致
候得共万一無拠時分ニ而西御番ニ致し候而も不都合之儀無之様
可申出候

一 巡邏中狼藉者等有之候而右形勢ニ従ひ人数
を以て向ひ門を閉め援隊之者共罷越候時分ニ
候得一隊を以四方取巻候儀も可有之候、左候ハヽ万一
手ニ余り候ハヽ銃鉄砲又ハ玉込を用ひ候而も不苦時

一 各役所ニ
信事之列之儀ハ兼而
右之通被定候条高札場申渡之候条此段
御蔵掌其支配下へ会ハ
卯十二月十八日
本営役所

一 日本政府大変革を成す事ハ要用なる場合に至り厳烈
正違なる事なりとも條約を一々履行ひ得る責ハ公子に對し
條約済各國公使ニ敬服感激の深きを申述する事要用
なるに付当今当地ニある外國公使ニおひてハ政
権を争奪せんと謀る黨與中に紛起せる議論も之際
なる事なき様等なる中へ会ハ上にて唯一事私意をなさるる様
要ハ是ハ各國の約定を元服らまし諸件を履行
見せし為確認を公衆に顕著なる様望臨む両民恨
和之政府を立てきんとのみや民望ハ均しく第一の
の主理あるて是ハ右公使ハ日本にあるて是ハ列國

之事勢を取扱事出来候て居りき政府はいつまでも是を
委遅滞難告せんとの事也　徳川貴公子其望を公理
を深く思慮せられ政大速にて已来右之彼等に付して
事柄を篤と尽すへき儀政府之議事盛行を告知せられん
事を望也

一 此度日本政体大に変革協合に至る条約諸外国も公使共
中述て居る趣を見よ　上様勉励信義を以右条約並
御述て諸藩述べ候を示読感服致し当時在留之各公使に
相ひてハ現在互ニ政體を討論するにて一切関係無
之に諸外国ニ政體歸依の諸国に於ても歸服し外国ニ対し
信義を失ハさるに付足又本国之事務に付川会用向きを
時ニ至り政府にて川会開公然と吹聴ありける当務之儀に
存ん候之　上様格ひても右条件諸書ゟ委出之書法度
何事の政府ニ決する川会ゟ悉き聊ゟ帰候吹聴ゟ致ス将要右

一 我祖宗東照公日本国之政務を率東大綱立其国家
至二百余年上　天子ゟ至下庶人に至迄其徳を尊ひ
其澤に浴せさるものなし　然るに時移り物換形勢一変し
外国と條約を結ひし以来全美なる良法も断欠ある
をも免れす　奈縮統之神より此事を熟考して京師と
協議し此法を改革せんとして是他会ハなるにあり候得
子憂国之心より赤心ゟ至余る祖宗以来得来候王権
を擲ち廣く天下之諸侯を聚合之議を尽し共論

採りて余國政府に速に旧弊を改めんと信頼せし
朝廷に存する此諸業を除かん為 先帝より遺命以て
幼主を扶翼せらるゝ摂政殿下を初宮堂上方数十名政
権を帰せらるゝ事を請ひ 然るに諸侯の公義ある決せらるを
諸事是にして適政権を執り居しより
其会議を待て断然甚層に臨まんと欲し 勅命有るにより
に豈料んや一二卿数名及諸侯等伏を常にして禁闕へ
突入し 先帝顧命の摂政殿下を初余か堂上を
放逐し 先朝譜代の公卿共を用ひて代らしめ
宸衷 勅命之旨を奉し 公議を待て将軍職を
摩せらるゝ事に至り 余の旗下譜代の諸侯大に憤激

し一旦卒に大臣を偽り密に國民心に背きて暴虐
の罪を責め無を挙るのみ他なし 然るに夜余に迫まり
徳川氏政権を投棄せしハ畢竟上下の人心を
一和せんか為なり 然るに廷臣等素志に何ぞ依
今の如何なる正理ありとも 余今乱階を醸し決然
為に忍ひさるなり 故余此禍乱を避けんか為一旦下
坂に及ひし 之彼等此事他人より視るも平快に
何そ於彼等暴の所業を視るに 幼主を挟み
叡慮に任し 私心を行ひ万民を悩ますに忍ひ
何ぞ國の為に争論せさるを得て義一貫の向ひとも黄論
し公論興論を開ひ偏に我國の條理を許ル是祖宗

東照公乃黎民乃餘害に係を　先帝の遺志を
継んと欲し天下と同心協力して正理を貫き事業
を遂公論を定んと希ふのみ他なし能はさる余か平和親
の條約結ひし各國も國內之事務累條依るに及まて
有る條理を妨くるゆゑなきを要せ余既に條約の全条
務るなす迄履行ひしるまでも高此上とも今誉を失
さる様各國の利益を持ち進る全國の元論をも我
國の政務をさしむるとも條約を履を為むし約せし
諸務を一くし而行ひ好殊此交際を全修る者余か
任にあるゝ事なるを諒せらるへし

一我祖宗東照公日本國之政務を主る事大綱二千
万目華二百餘年上
天子之下庶人に至る迄其位を尊ひ其擇に浴せさる者
なし然るに方今之形勢一変し外國と條約を結
ひし以来全美之良法も虧るゝを免かれを余継統
之初々此事を熟考して衆師に協議し此法を改革
せんとせし先他念ある小邪之人海之憂る覚民之未心を
余か祖宗以来保ちし政權を擲て廣く天下之
諸侯を聚め公議をさとし輿論を採り余國政府之
建法雪革を定んと法約をも以

朝廷を奉し此鴻業を成んとす　幼主を扶翼するの摂政
先帝の遺命に依りて
殿下を始め　堂上方数名余か政権を帰する
事を議し以て諸侯の公議に決せさる迄ハ従来之
通政権を執行ふへしとの
勅命なるにより余ハ専ら会議の期を待て諸侯の
帰京を臨んとせしに小臣輩か一類数名と諸侯
兵仗を帯して　禁門に突入し
先帝顧命之摂政殿下を始め一二之堂上を擯逐し
先朝継体之公卿堂上入替代らしめ更に廃前

勅命を矯め奉り　公議を不待将軍職を辞し廃せしめ
候に至れり　余か旗下譜代の諸藩大に憤激し
日来其怨を懐く
皇国臣民心背きし　暴戻之罪を責めんと欲す
是れ他なし日夜余に迫れり然れとも余か政権を
奉帰せしハ畢竟上下之人心を一和せんとの為なるに
若猶之過激に及はす素志に戻り依令如何なる正理
なりとも余より乱階を醸し事決して為すへから
さる事也　故に余禍乱を避ん為に下先下阪に及し之
然共此事他人の視るとき事状に非して余ノ国を

憂ひ民を害するの情なく彼の所謂暴と正業を乱る
如きを挽きて
叡慮ニ托し私心を行ひ万民を悩まし君を
外國之為に弁論せさるを以て第一暴又とし
告諭し公議輿論を問ひ偏ニ我か薩法を行ハ
是我家 東照公業民之節度ニ依り
先帝之遺志を継んと欲し天下と同心協力ニテ正
理を貴き本業を遂ゆ公議ヲ立んと希ふ之外他なし
然るに余ノ言と和親之条約を結ひし各國之國
内之事勢ニ関係する所を我か條理を妨るゆ

るへきを要して余既ニ条約之箇條悉く履行セし
事既ニ難くとも今巻き来さる様各國之利益を
扶け返書國之所論をは我國之政務を定メ追々条約
を履之各國と約せし談判を承ひ始終之交際ヲ
全ふせる之余か任ニ於ることを知るへき様せらる處し

卯十二月廿日
徳川慶喜

右同府公ニ居利席ル英ノ通辯官サトー訳
同

伏見表今度御一變革彼是多端之虚ニ乗し狼籍之
者横行人心不安趣相聞候ニ付急度巡邏鎮定
可有之
御沙汰候事
但伏見市在取締之儀ハ田宮如雲ニ兼勤被 仰付候
尚又巡邏之儀長州土州藝州日根野被 仰付候間
為心得相達候事

去卯十二月廿一日参與御役所ゟ只今御用候ニ付罷出居
候處承山右内并私共御召出非蔵人菱垣様宅ゟ御渡被為
在候書付並御沙汰書等之通夫ヨリ段内田仲之助へ依頼致度

らくし首尾書らくく

春山田中両士日記

此條ハ廿五日以後ノ事ニ係ル

廿一日

尾越両侯ヲ大阪ヘ被差下又々御内諭アリ其趣　天朝ニ
政權ヲ奉帰上ハ自ラ八百万石ヲ可差上旦前内大臣号ヲ
賜リ諸侯ノ上座ニ列セラレ二百万石ヲ別ニ被下トノ事ノ由ニ相
キコユ　徳川氏　勅命ニ聊不背トイヘ𪜈弥會桑等ノ沸騰
鎮静出来無ル事ヲ以矢張前書ニ不相替事ヲ延ス然𪜈廿
六七日ニハ取押ヘ何分御請可申上トノ事也尾越ノ両侯空ク
上京委細ノ条ヲ被申上我臣ヲ取押カヌルトテ
勅命遷延スルノ條不届ナリト　キク

廿二日晴

廿一日

尾越両侯ヲ大阪へ被差下又々御内諭アリ其趣　天朝ニ
政權ヲ奉帰上ハ兵ヲ八百万石ヲ可差上且前内大臣号ヲ
賜リ諸侯ノ上座ニ列セラレ二百万石ヲ別ニ被下トノ事ノ由ニ相
キコエ　徳川氏　勅命ニ聊不背トイヘ𪜈弥會桑等ノ沸騰
鎮静出来無ル事ヲ以矢張前書ニ不相替事ヲ延ス然𪜈廿
六七日ニハ取押ヘ何分御請可申上トノ事也尾越ノ両侯空ク
上京委細ノ条ヲ被申上我臣ヲ取押カヌルトテ
勅命還延スルノ條不届ナリトキク

廿二日晴

今日三條公四條公東久世公澤公壬生公首尾能御還京
再ヒ喜ヒノ眉ヲ開カセラレテ五ヶ年ノ御労リモ夢ノ世ト
ナル三條公則御恭内直ニ議定職ニ命セラル四條公ハ錦
旗奉行ニ被仰付

廿三日 廿四日 無事

一当時御政体御変革速ニ御国々御布告当
然之御事ニ付御布告文勝者列侯会盟ニ而差出ニ候迄
之儀ニ思召ニ候ニ付テ事理的当之御文体ニ有之旨
然ニ此儀
朝廷御親政之始元重大之事件ニ付猶又及愚
考候処只今之形勢ニ而ハ未 御政体維新之鴻基
夫ニ御順序相立不申候ニ 閣下未定ニ付諸侯勝之
五六藩見込ニ而御告文列侯会盟ニ而逆之御告示未有ニ付
然ル処且外国応接ハ是迄幕府御委任ニ付
至今迄之事ニ候得共此上未熟ニ而御告文与御事実

之様齟齬有之御國論まちまちニ而ハ疑惑被生候事ニ付而ハ
中〻義無之以於德川内府茂御依頼列侯之伐候ニ付
閣下之論旨致候而ハ廷議ニ相係リ候而諸侯茂衆議
朝廷ニ而参考御体裁之公議ニ付審決後日毫髪
之遺憾無之様被遊候上ニ而御布告相成候識ニ以
列侯會盟之御事実可被行
皇威御國ニ被光耀候事ニ相成候先達ニ而幕府を
朝廷ニ奉還之上ハ德川内府も一藩之御國ニ被當候
以後ハ命令之儀考慮仕候
卯十二月廿二日
松平容堂

一德川内府之所置之形勢柄無之候政権を奉歸付於
朝廷之善儀 公儀ヲ取偏黨之私なきを以衆心と 御裁決ニ被遊候ニ付而ハ博く天下之
赤心を以体國を国し德川初之を制度美事良法をも從
以来之御変更無之候列藩此 聖意を體し公府
之儀を不憚忌諱極言高論して救縄補正ニ力を
尽し上勤王之實効を顕し下民人之心を失はさる
皇國をして一地球中ニ冠絶せしむる様泮属共致候
御沙汰之事
十二月廿二日
別紙之通被仰出候付其領内者不洩様領主ゟ篤と可被申渡候事
右制札ニ御掛相成候ニ付其地之制札相成候者掛相成候事

一 朝廷御変革大令御発顕之事
但大令草案於評議所一御決定之上既往を
不論天下と共ニ更始一新スルノ義出ツへし
当日議定御方不残集
内在京諸侯并重臣在京之者出席等
一 宮門様兵備之事
但外門御固ハ厳重ニ諸侯兵備之義中立之備一切撤去
候等
一 市尹之事
一 人材御撰用之事

但於評議所広く天下之人材を薦挙（右イ）公令之旨
一 制度改正局を開クノ事
一 辞官之事被　聞食候ニ付候
異本以下ノ二ヶ条別紙ニアリ
朝廷辞官之例ニ倣ひ前内大臣と可称候事
一 政権返上之儀　聞食候上ハ御政務用途之分徳川領地之内
夫々返納之上天下之公論を以御確定可被為在候事
右条々心得迄ニ申達候
御所ニ而被仰出候事
卯十二月廿四日
此御書付尾州越侯より御所ニ於て被内諭書ニ奉持候事
二侯ハ下坂之事

一今度武家伝奏御役被廃候付而ハ左之如く参与之儀
御役ニ於て右職之者ハ但右等御堂一条院坊主ニ而
役之者ニ而新設之上其儀役所之者ニて右役所ニ
可申事

但右掛り之方ニ

大原宰相様　万里小路右大弁宰相様

長谷三位様　岩倉右中将様

橋本少将様

右者等ニ而取扱可申事

一当時駈伝之形行天下急務之勢を蒙て一昨日之
去年八月九日未明
御所内ニ依て無法狼藉之起本ハ右備大
隊等手兵ニ而御所之警衛ニ浪人駈
集難叉其等を追清ニ大備以後八ツ時分より所々
方集之処而駈伝山斜然而幕府合戦兼名
新撰組ニ京城護
御所ニ薩摩若狭浪人御警衛を申付既ニ
右秘之秘ニ若十八日夜分再度徳川家へ政権
去延白右会津其兵名南部新撰組

之者ニ而和泉守伏夫ヲ越前公ニ而幕職ヘ再三入
城致候様被申候九月十二日登城ニ相定め
殿之藤倉殿ニ武威色めき候様十二月十二日夜一
橋公ヲ御合は不被為被成十六七日比ニ而断ニ相成
め捕らへ候処御役人出候ニ内勅之儀御座候佐京（村田カ）
新八与申仁都合四人会津屋敷江召寄ヲ仕候ニ新
おとかめ守衛将召取候人ニ而殺害ニ及ひ御座候
右新八ニ而も藤兵衛式ニ而不手負ニ而し御座候
掛殿之儀ニ而先代召事ニ相成候只今伏見
奉行所屋敷と申方浪人御集り御座候様ニ而御座候
まゝし

差支候決る事中ニ付まる事ニ申候ニ付御座候而申候ハ
一 被為入候之五月之方御帰京ニ相成候由ニ
一 飯（有カ）栖川宮様議定総裁ニ被仰付候
一 尾州公越前公土州公藝州議定職
一 君上八廿将議定職ニ御委任被仰付御座候
右之通ニ候中ニ存候
右十二月廿七日付参り状写也

廿五日雨

今日ヨリ大坂城中ヲ発シ會桑新撰等追〻軍勢ヲ繰出シ川舟二百餘艘ヲコキツラ子陸行ヨリモ敍到（雑沓カ）シテ八幡山崎等ヲ根據トナシ淀城伏見ニ出張シ其勢ヒ當ルヘカラサルニ似タリ依之薩長ノ軍共追〻被差向互ニニランシテ陣営ヲ張ル事ニ及ハントスルコト度〻ナレ𪜈未タ時不到シテ味方ノ兵氣ヲ養ヒ居タリ今夜歩兵六七人市中ノ財ヲ奪取コトヲ知ツテカラメ捕ル

廿八日時（晴カ）

伏見出張ノ都城兵七人命ヲ受テ伴候トナリ奉行所ニ新

撰加ハ居タルヲ伺フ新撰組其躰ヲ見テ三十人餘追撰
小銃ヲ発ス私領兵其場ヲ逃去リ散々ニカヘル依テ軍
律ヲ以テ七人ノ首ヲ斬テ衆ニ示ス

廿九日晴

今日東寺宿陣ノ兵ヲ上鳥羽村ノ要害ニ繰出備ヲナス伏
見両方ノ軍勢互ニニランテ對陣ス

一去ル廿五日朝五ツ半比より江戸三田通西御門通表御門通
銅御門通都而松平山城守様阿部様酒井左衛門尉様
其外公儀役人多人數具足鉄砲抜身刀鎗大砲備立
大目付衆又者御使番衆之間篠崎彦五郎殿御長屋江
被参御談央三田通御物見より此御方江御屋敷浪人
共より鉄砲打掛ケ申由夫より外堅方より大砲御物
見江打込双方より戦ニ相成私共お召並ニ而御長屋銕
砲打込出火ニ相成固めの人數も三分死手負も御座候此方も
浪人上下死人も二十餘も御座候

一篠崎彦十郎殿儀者公義役人同道ニ而御長屋より出ニ而何方へ
同道ニ而越候哉不知とも今以無御座候

一 勤番定府人数之儀者手向いたし候者共お捌ニ相成候者共
又ハ手向も不致候者ハ夫々應し一堅人数ニ而何方え
引渡申候由私共早繰ニ出入方御用ニ付差越掛場掛
候処右次第ニ而場を漸々相尋き相成申候付当ニ出候
出居候市中之風聞氣寄在之候中申処　御國歎と
存候此頃ハ至迄ニ而其候共御備連年にも　此御方様格年
安藝守様格年土佐守様不存候出陣之候所候成候内出候
之異変ニ付而者都而御家中も火を掛ケ候事候由御
之仕業ニ而勤番定府大小着之儀ニ而ハ其場を遁れ次第
込入居申候
一 私共儀者金子等も餘計ニ無之而持合無御座候ニ付公義
御要意勤者ニ付而者仕度も漸之一度位出入町人所ニ
忍ひ居ひ位ニ御座候得共此上者不申出候内ニ相成候御要之
出陣御先之者存し候而内私共身ニ其ひ公義御用ニ而向
委曲申上候而ハ不相叶御座候 其上ハ我ニ而右之上者以而御捌之
相成候者 昔日 誠ニ残念次第ニ御座候
一 諸人者共御出居候ハ何様之節合ニ而 諸方ニ出候ニ付相成
無之ニ付出候而御座候 勤番定府ニ而ハ御沙汰も一切無御座
私共ニ者何様相成候御用之向ニ而多人数ニ而切り込ニ付御沙汰
賄酒ハ空次第ニ而申候由御家中ハ能々ニ而 此節之儀ニ付
無之人数上下死去ニ而十死一生之御沙汰ニ而我ニも儀ニ付
何之要具ニも手当いたし候儀も御沙汰も無御座候

右人数ニ而御老中江一切不差出儀ニ而無用と申事ニ而御城
中ニ候
一 高輪ニ而屋敷焼払ニ相成御老中ゟ数ヲ者を付相掛
成候処家来共捕押候ニ付実ニ何れ薩摩ニ而ハ高輪御屋敷
近辺之人ニ而も右之儀役人引渡候処軽キ者ハ縄掛ケ主立者縄
不掛由 御老中之段ニ付而差出候何も不知者ハ何ニとも難儀
仕候事ニ御座候
一 上野上[増上カ]寺ハ御大名御固メ内ゟ見付候都て〆切ニ相成候
一 右御固メニ而相掛り居候 横浜之由
一 浦ニ之方之儀ゟ飾程御つらみ由ニ付ニ而方評判仕候
一 立花壱岐殿も之様ニ由家来ニ而付役所何方ニ罷在

然年実正之程不知候
一 浦賀辺も追々焼失之由 一 米も追々焼失仕候由
一 市中江ハ浪人者薩摩ゟ屋敷ニ相成候ニ付中ニ而相厳敷
之候処御出入町人共也 薩摩屋敷者来り居候也
見当り次第召取り数日中役人ニ被成候
一 三田辺ハ横も同所固メ人数ニ而大砲等之火を掛焼
払ニ相成候ニ付大円寺ゟ火を掛ケ申候ニ付何も焼ケ候
一 桜田御屋敷之儀ハ古来より固メ払候ゟ火者掛り不申候
一 芝御屋敷近所江酒井様固メ出張一ヶ所ゟ夜中ニ候
一 二ノ丸 天璋院様御住居 薩摩浪人火を掛候様ニ而方々
評判仕候

一見付外浪人薩摩之由ニ而召捕方ハ不残方掛役人
御所ニ相通り申候由御出入町人方ハ市中名所等ニ掛
並間合央ニ而夫々私共も儀ニ付夜ハ気を付居候ハ時分を見
合御所ニハ振子を替公儀之御要害間合方仕候
一浪人共召捕候儀ニ付御屋敷是非ニ而御取締候ニ付御座候
屋敷ニ而火を掛取ニ焼拂相成候ハ何れも御様子
幸便ニ而候 除之酒井勢ハ三千人余と申評判ニ而私共
山城守様ハ四千人位ニ間取候之由人数御座候
一高輪御屋敷之儀ハ表長屋を打ニ而焼失ニ而内證居候ニ
御殿迄も残り申候由ニ御座候 私共不残案内ハ残り内
屋敷之儀 并 件様子見ニ而間合方仕申候 公儀役筆

御手当出之儀を能く届申候由
一右之趣私共御儀等も以之外之儀ニ不及調子之趣不及下 右形行言上
仕度夫々も無之夜分片時も不寝夜明し 御之方を見ひ間合方
仕申候
一横濱異人館方も別而之囲厳重御座候
一御普代御大名并旗本武器手当 之義何れ御手当退之御座候
承候ニ付上ニ而成丈ケ之事を承ひ御府内御手当ニ而其余承り申候
一私共当月之御儀等も不分 所之揚合等も無御座何方ニ御用
仕候者も有之候ニ付私共両人御儀ニ準し右之趣右之者ハ右迄事会子
一頂戴ニ付候處 其余も奉願候 此上ハ何分ハ右迄事会
承合候者無之候ニ付 先祭之私共十死一生ニ而御沙汰を

此節会所ニ而右御方住居ニ付
右之通形行ヲ以差上候様申付ニ付奉申上候 進上之候
宜ニ進上仕候 上申 以上
卯十二月廿七日

此之奥右筆蒔菊
右目見経 佐藤出羽守
池田長年次

御用部屋
此役人中様

右證文保会所ニ而写之致し置可申候

卯 十二月廿八日付伊勢守ゟ来ル書状之内ニ

一 一橋ニ而一味沸騰致し候由ニ付 淀城ゟ歩兵
新撰組凡五百人并 籠城之方人数凡小隊ニ而
七ツ前之勢 其外廿日前後伏見ゟ出陣 同朝對
陣之處ニ而候 以之ニ而候ハ、右之者追越 申候
可成ほと破れ候 閑旋之為ニ相成可申候
ニ而候 御座候ハ、如何なり候哉 難計 押量 仕候
未文略之

一卯十二月廿七日日之御門前ニ而西役所三条并ニ大
御三役西役所ゟ弓矢分薩州長州土州藝州
之隊人数調練被遊
叡覧候処 御出ゟ四藩共弐調練有之
候ニ付薩州事ニ付相済候
叡覧中ハ誠ニ御代未曽有之御盛儀ニ而
難有時節ニ世代之会中ハ一書ニ出所之備ハ難振人
候而ニ備之分ニ而二更ニ小人数ニ而相成二番大隊
州之備是ハ鉄砲人并ニ而相成之書長州
一大隊之調練ニ而凡四百人位ニ而半モ相分り候

凡事ニ〆候ハヽ四番 此節方様備一大隊ト申人数
取扱ニ而 此備ニ加り候ハヽ一通り調練仕候ニ
又一大隊十小隊を一ツにいたし 凡人数千人ヲ
越候事 請ツ当方出候ゟ候ハヽ 其後ニ海軍相越
備へ候ハヽ 手薄ニ相成 中々右人数ニ而ハ手不足
ニ他隊を見合手強ク寄せ来り候而 無之候其他
唐ト異国ハ 凡四五万之人数ニ而有之候ニ付
申上候ニ〆候ハヽ

右何某 蘇カ 根新助ゟ 十二月廿四日 仕出候書状写

一 只今川小氏当着 伏致成 別紙面写極之候元気高
明致罷許候由ニ付写置候 一筆啓上仕候 寒気之節
之御座候得 御当地相替神上候而 当月中長州候処
来ル含大坂此事ニ付扱和之 去ル廿二日ニ而当
此当藩之南月中伏見 浪士附南部当藩根元銭
之今之元年 宿陣仕居中 振是迄 去ル九日
以来ニ一条 追々 写 大騒動
何方ニも取出致勤中ニ当家ニも 幕府 ニ而
新撰組 扱居 大概千人余も 取居候 淀八幡
之ニ而 余多取居候 押へ方ニ前件之通

我こ人数を被仰付候　去ル廿五日尾州越前両侯
勅命ニ而大坂ニ相越し候一橋殿へ面会致し候ハ人数
引取方之義ニ付何ヶ条も申立候得共中々承引不致若違背
人数を以引取候様ニとの事
勅命ニ而討伐ニ相成よりハ却而信服無之　長州ニ付
此節ニ至りて一書之趣を言上し日限ヲ以日々ニ相待候得共
御沙汰ニ候へ共何分不申来候而七日迄ニ送リ越ニ付其旨を相分
とふても此上ハ死亡と相見得候ハ此上ハ京都ニ而
御国ニ而も越前ニ而も夫々諸藩ニ調練日々御用ニ而被為在候
朝廷

御説之通り御謀之不容易事ニ付此上難捨事ニ付我々も
前文通りニ而不相成防(紗)候事ニ付陣中ニ而御隠之も
四月迄も相(改)待候処何分御役人共ニ聞ても人ニ白気明白之
決心相待申候　此節ニ至ニ而天下御政之境目ニ而御座候
所ニ而不相成候事ニ付御沙汰之処(手)ニ而相成候中ニは打角違[illegible]
不被仰出候御趣意之儀ニ付中上候処御座候一条委細申上候
山之未落着ニ相成候　両所之陣ニ而も不相調候てハ甚[illegible]
帰京之上ニて　御前之上左之通り　十日之も見舞も
何日之事ニ於ては[illegible]　此節
一条　御所向之義[illegible]

無之候得共何分ニも御座候ハヽ毎晩夜半ゟ
交代ニ隊ニ而不寝番ニ而上様へ申ゟ御見廻
邏いたし候事ニ申上候近在手前方様今
ニ候ハ来ゟ出入山ニ在之候使ひ申上候得共
細川少将ゟ此度者御座候所ゟ罷越候事候
在候ニ付参り申候来年ニ出張之儀銃隊中ニ在
候左様存候存念之一左右承り申上候所恐惶
謹言

十二月廿八日夜
暁七ツ時認

御見兼春岳陣ゟ
伊地知壱之助

伊地知壱之助様
御男衆

園田新左衛門書翰

一筆啓上仕候寒冷御座候処先以御揃御機嫌克被遊御座恐悦之
御儀目出度奉存候随而私儀無異罷在候間乍憚御安心可被下候
中々右様御安易御思召下されハ

一当月九日朝四ツ時分ニ本営役所ゟ一紙隊長ニ只今御用有之
ニ付出候御参銃ニ付銃隊ニ而御警衛として被出候様被仰付
来ル仕道集場ニ被出候様被仰越其日乾御門前ニ六門之内
准后御門前ニ大砲を備御警衛仕居候処昼八ツ時分御門内
夜八ツ時分ニ御籠敵ニ相成申候相御所之内ハ筒袖バッチをも成
官ゟ銃隊ニ踏込御警衛仕居候処銃隊ニ割付
相見ゟ今日ハ晴天ニ雪ハちらし降り昼四ツ時分ニ白面

洋布合羽ハ御渡り有之此時分ニ布屋ニ而張り内ニ入御警衛
夜八ツ時分ニ交代ニ而罷帰ル今日ニ御参代ニ尾州越州藝州
薩州并長州ニ而相成候会津并桑名抔も御望メ抔ハ御免ニ相成たる
長州之一条も先年ニ通御免ニ相成候而ハ又戦争ニ相成り候て
合之詞ハ何々サツカ答ヘラ イ 同十日大砲隊ニ而ハ半隊ニ而御警
衛ニ而急ニ当ニ御所ハ専ニ近付候ニ付極り今日限ニ而ノ通時分罷出
交代ニ而無し御警衛役所ニ而通時分ニ御参代ニ而被下候時分ニ
御陣所ニ相詰候ニ今日ハ御下ケ酒相酒さし候ニ付夫ニ付何共難有候
長藩人数ハ凡百人程御固人数ニ陣営 相固メ之内 右御固メ今日
若ニ相成候ニ付又会津も今晩守護職屋敷々大砲ニ而 押
二条之城ニ相詰候一橋殿内ニ居桑名も同所ニ相詰候

長藩も九ツ門ノ内ニ入巡邏抔ニ而無し中半ニ而相済候へ和兵今晩ヨリ
時分ニ交代罷帰り申候今晩之合言詞ハサツカ。サツ 同十一日罷帰り
時分ニ罷出交代ニ而無し右同所准后御門前ニ御警衛夜四ツ時分
罷帰り居候処一橋会津桑名今晩ニ掛ヶ与被和兵隊之監軍
村田平右衛門殿今日ヨリ当ニ准后御門前ニ而近付自分罷り之大砲ニ
相付御警衛仕居候処風説ニ而承候何事も無之相済候海軍隊之
監軍村田新八殿夜五ツ時分ニ巡邏ニ出候処紙ニ而守護職屋敷
前ニ而［会津］藩之人村田氏ニ切掛ヶ候而向ノ人戦死致ニ人ハ逃去り候
村田氏ハ跡ニ而疵ニ一ヶ所背ニ一ヶ所相受候而も命ニハ別条無之候
承り申候今晩之合言詞ハ山ノ山 同十二日大砲隊之分ハ准后御門
前ニ在る下之立売御門外ニ布屋ニ而張り内ニ入御警衛致

時分ニ至代官殿御中ニ而晝時分ニ至り今津屋敷ニ火ヲ掛ケ候而
寄掛ケ候ニ付何も御本門前ニ張付為起風說ニ而大軍何事も
無之殿御中ニ而ニ至り入候御本所ニ而御酒等出候処夫ゟ宣七ツ時分ニ
御奉代ニ寄候起越前様急ニ病気ニ付御奉代無之候ニ付同夜一揆
今津屋名下國之郡ゟ上り候處郡迄御免ニ付相振取りゟ夜五ツ時分ニ
御屋敷迄ニ参り候を今津屋人數大勢七ツ頃押上り候様前屋敷と
名寄り為知候處下國之郡ゟ上り候処晩御屋敷ニ参り掛ケ候ニ付統一
候所ゟ為知候處晩ニ成而扨振候事ニ而死乱扨又一揆ニ而不分候事候
往来ニ而出陣ニ而不申計りニ往来候ニ而何事も無之候
其内一揆ニ而上候處今津屋名大阪ニ引下り候而大坂表
國へ下り候起其ニ而在之候ニ付陸ニ砲数ニ而候而勢之様

大阪之國へ下ニ候而一揆ハ上京ニ而無之候而扨候御免ニ付坂表ニ而夜五ツ時分ニ
二条之城へ揆出之時馬塚錢塚半里程引續キ往通り候中ニ而
殿下坂ゟ出候者何知在之候者其之条之城ニ而ハ道筋之人數大勢ニ而
家中之事ニ御座候之晩ニ合詞サイカ。起同十三日朝五ツ時分ニ
松平代右衛門下ニ而御門前ニ而之御籠衛之晩之合詞ヨイ
ヨイ今日より御本所之御酒等出候處御免同十四日朝五ツ時分ニ
年代ゟ殿御ヶ日庭ニ而計ニ而候処無免一人之者ゟ参来り
其下難之事ニ而参之愛等海ニ而又咄り事ニ而候扨又
御本所之急ニ御登メ候得ハ場所ハ今日之引取候ニ付
今日引取御登メ候付南門尾州日ノ御門七州紀州御門
薩州御本所御門薩州今津お登メ候ハ九門之何ら御門之

長州ニ而何れ之者共 今度爰迄罷出候ニ付 擁護申候事ニ
南之方皆役人共ニ 今度筑前守人数相越候ニ付 出来致 御座候由
示し候処 藩中ニ而者 長州并薩州之藩中へ 御引渡 右之人数を国
いるゝ所 相模様ニ而 屋敷押付致候而 廿七日ニ相引候而 左近衛権少将六
打方 薩州長州土州藝州等之者共 決而不国ニ相成候 擁護有之候
善之者 相待申候 一勝ニ而 色々御手当有之 大小筒 毎夜 善之
中略ニ而者 御戦申 大砲隊ニ成候 御蒸気之場所前ニ而 出陣候而 一書
夜之御仕置 人共参り候 大延夜撥仕候 出張之儀ニ付 御名 筒袖
バッチニ而相成申候 場所ニ而 ニ而ニ 難渋夜之事 夜相成候共 雲 拝申候
筒袖打 大砲打仕候而 場所之人数 会津之人数 ニ而 退て ハ 不出
ニ相成候 之外 [illegible] 出 延金子 [illegible]

土州会津ニ而 家文土州会 出来不申候ニ付 隊之差出刀之者共 土州へ参候事
浮浪氏之者共 土州へ参候 一向太子目 御台所 御覧之者 左様之事 事ニ付候
人々多分苦難様子ニ而 出陣 仕候場所 宮内 残念之次第ニ 御座候事
右思召も有之 少しも御覧 七ヶ所 有之 事ニ付 左様之場所之夜撥 御座候
拝申候 土州 部 并 大砲 申候 仕り 御台ニ而 尚 御一新申上候
此文 役人之一条も 右様申候 [illegible] 申上候 此節列強国 毎度
申候 御相見 て候 此日ハ 五ツ半時 [illegible] 延 [illegible] 毎度
色々 [illegible] 場所 小人数 延 土州 藝州 長州 薩州 大垣
此ニ而 [illegible] 書 [illegible] 大砲 [illegible] 仕候 朝廷日ノ御門
前ニ 出陣 [illegible] 大 [illegible] 之事 [illegible] 上京 [illegible] 上洛
此節 三条様 [illegible] 右様 [illegible] 申

御國之御難儀何分ニも於御勢ニ無残上目出度事ニ存候
先ハ此段御伺旁申上度如此御座候尚此節寒気強御座候間随分御厭被遊
返々御保養専要ニ奉存候先ハ右申上度御祝儀申上候
一〻右之趣宜敷御披露被下度候恐惶謹言

子十二月廿八日

父上様

母上様

園田新右衛門
実明（花押）

舎人ニ御申

追而申上候当月五日差出候御書状并菓子御用部屋より相届
之段申上候宜敷御届申上候村岡氏ニ別紙を以申上候
一條幾之御儀ニ付御文参候ニ付来月御使者差上候

折〻之時〻御保養専一ニ奉存候私事無異罷在候間乍憚御休意可被下候

一筆啓上仕候寒冷之節尊前様益御安祥可被遊御座
御先芽出度恐悦之御儀ニ奉存候二ニ私義無事ニ御安意
無事ニ相勤罷在候間乍憚御休意被下度候扨
勢ハ先日池田播磨守之大橋御町奉行所ニ而使者西ニ上
置候御役免之身ニ而後ニ大橋屋敷等ハ
矢張御花城ニ集宍粟等ニ楽共ニ
中ニ者無御普代諸大名方之所ニ御聴在之候
御称号姫路様ニハ右之趣ニ而御承知被成候母上様ニも
紀州家様ニ徳川氏之稿御帰国
様ニハ追而之大阪之出兵相勤候由風評ニ御座候

一尾州老公趣前事嶽ニ而ハ一橋殿ヲ以テ申立候由此方
ニ而ハ如何ニも此上ハ一筆ニて御決し可有之旨
一筑前宰相殿よりも趣意如何之事ニ而五ツ方昨日御帰
陣ニ相成申候由
一此廿七日岩藤長土藝之四番隊操練
御覧ニ付御家来衆御行事ニ而日々御門前御機嫌伺ニ
相成ニ付右二番隊三番隊五番隊位ヲ以一大隊御国
二大隊ニ相当可申候 大砲隊壱隊ニ操練之見分有之
右之雑有位合之候所御差図之余年被申候
御雑役方ニ而ハ如何ニも見分之様子ニ
卯十二月廿八日
岩佐長左衛門様
中原猶介
御史

一宰相殿之御儀中ニ而御呼出ニ付右之通申上候
御機嫌御伺之儀ニ付是非共御相談之上
老中若年寄ニも其上ニ而申上候
光様御初和之義ニ付右之趣御聞込御座候
此段御答申上候様被仰付候
将軍職之儀ニ付右之通御座候
見分之上御達之筋有之候由
右之趣ニ付院ニ砲隊之事如何
九ツ時御出立之趣
多人数ニ而操練
右之義ニ付操練入夫
右之通一橋殿之儀ニ付
解兵之儀評判
一出迎合之節右之通
相済大砲小銃ニ而玉込合之上解兵之儀ニ付
御座候

中ニ而御座候所当年御覧ニ茂不相成候得共
御前ニ而御鍛錬人数ニ大義ニ被
思召御酒被下置度々被仰付難有奉存候
右何茂ニ而是迄之通り致度旨申候處右ニ付而も皆様御頼申
上候 尤此己前ハ九門團之人も鉄砲独ハ六ツ才成ニ而
二而も 鍛力ニ不相成候而茂御座候而茂 此表飛出之候ニ付而六門式
御書院ニ而も 御鍛錬之節鍛力ニ付 諸事而見付足文
此舟九日ニ至 土州藩并長州薩州 四藩之調練し
御覧被遊候文 然ル処御座候ニ付 右御様調練し
次第ハ 余ニ図有之 抽籤ニ而御座候 二条様之も
此日 御出之上ニ相成 右様思召候事ニ候

一
上別府森次郎 久保矢九郎 杉崎少吉 此者共三人列座ニ而先
抜出し大坂ニ而様子致候銀ニ而二弁と申者へ押込いたし金子吉
兵衛方へ出合候ニ付相渡候ニ付 夫より八右衛門参り候 四百両
取候ニ付金子振舞候の者ニ而も 右之者共ニ而大坂新町ニ罷
在り銭藝子揚遊いたし酒酔致し候処人数体候得共
及自殺致候 右補ら立能在候 右共露顕ニ相成候上ハ被是
致ニ付 殺方之義ニ付仕置宜敷御座候
可被参評判ニ御座候
一
三条様御供人高山律良馬殿組大坂ニ而紙店へ参り右之根
方ニ付御手打之様之十人 大坂ニ而殺候ニ何事ニ候者と申候
候 右者共通り列座ニ而 右之者付添候 医師前田何某と申人ニ

難有く此度参府致し候付紀州表ニ而も之仕合何ほと歟御用
自然有之事と存候得共何も沙汰今日迄無之
無之旨承知候由
かしこ

卯十二月廿八日

肥田喜平次

御祖父様
御祖母様

東御門 尾州様
清和院御門 備前様・
女房御門 同
石薬師御門 井伊様
御花畠御門 同
蛤御門 長州
同 山崎ニ一ケ所
外ニ 紀州様 并十津川様 二ケ所
堺町御門 越前様
寺町御門 細川様
中立売御門 因州様、
新在家御門 藝州様
同 一ケ所
下立売御門 宇和島様
乾御門 薩州様
今出川御門 有馬様
日御門 土州様
公家門 同

一 旧臘九日
王政復古之儀被仰出候ニ付既ニ天下一統御布告相成
候得ハ疾ク御承知之御事と存候 二百年来 幕府驕奢
武門之政権を 朝廷ニ奉帰 重事ニ付尾張様ニ一
統一致之義ニ無之 諸藩之政権を人ニ帰候子細
を以周して相済候得共 無之候由御同意ニ付 主衆と争も
及ニ血を不流 して御所儀衆人驚嘆之趣 外之儀尾張様
徳川家親藩尾越之周旋によりて同十二日一條城
下阪且御上京之節 両三輪鎮撫之上 又ニ一橋公上京御沙汰之節
京師一往鎮撫ニ相成 同廿八日 薩長土藝四藩之隊
調練

叡覧有之尚朝敵御追討之御催被為在候処
居候処十二日一会桑下阪已来尚逆之色を極メ
事故必死動キ之時節伏水幷所々江
淀八幡山崎辺江会桑兵新撰組等集屯
集市巷之人家江押込狼藉致以多し民之憂成
生し候付諸国浪士西洋諜合以逃遁を企会陰謀
之有以伏見淀々張出之逃遁を職掌と致し
押込等致も有之人数も擲居り婦女伏見市中江ハ
猶更ニハ新撰組募（募力）等凡武士人数弐拾四回廻
しく柵を張ひ大砲幷其余人数等厳重ニ取囲
淀城下町家辺江屯集しく勢子共人数弐

都を進入候含ニ而激徒之者共ハ一ハ勢ひ力を得候事ニ而尾越周旋
様子ニ寄候而ハ不日ニ攻上り候哉も難計
之功も不相挙候故又三日を限り功を挙候様
命有之候処廿八日尾越下坂有之候処廿九日論白書掛上京
奏聞之趣ハ二条件を呉儀承請仕候得共伏見
表ニ出張之新撰組一同不承知ニ付筆頭ニ而相帰（言葉カ）
十一日井上求弥組与申もの人数を以確と相守候処ニ
此之度旧藩臨白主一番手屋船ニ而候処大
砲隊伏見江出張巡邏として至代其外同所手配
出伏彩之下右時分出伏仕候尤大砲其余多分相
越候ニ付申白ニ而伏見一柱林院与申寺ニ本陣を相備

叡慮有之為胡蔵御追討之御催ニ相成候ニ付急手
居候趣ニ付十二日一条殿下臣已来高辻之者を捨ヶ
寺社等ニ立寄動もすれハ明ヶ所ニ依ル右等所へ参り
淀八幡山崎辺ニ会合屯集候新撰組其余共退キ屯
集市巷之人家ニ押込捕縛等以為し民之憂哉
生シ候付諸国ニ人家而縁探索いたし以巡邏ニ付候上陸
也以伏見辺家ニ張出之巡邏を厳重ニ致し
押込を等々ニ寄之人々も捕居者ニ伏見奉行所ニ
猶説ニ新撰組募等之凡弐千人程ニ周回候ひ
しく構を張ひ大砲ニ而備人諸事厳重ニ相見
候處城下町家辺ニ屯集之勢余程之人数ニ候

都を追込候處去ル廿日激徒之者共一ト勢ひ大炮ニ而
様子ニ而不日ニ攻上り候趣ニ付而は尾越周旋
之功も無之拳而前文之者を取り功を奏候様
命有之候廿八日尾越下坂致し候廿九日晦日ニ至り掛上京
奏聞之趣ニ付存無之儀御請仕候ニ付而伏見
奉行所へ申談し新撰組一同ニ申付華々敷警衛
之大砲并之引続兵之人数相備之上相揃候得共
少之者共は田舎旧縁ニ悔申共一番手居候処ニ付大
砲隊伏見之陣巡邏ヘ之交代出ニ周囲ニ致
出伏稲荷山ニ出張之出伏候ニ付大砲其余多々指
越候事同日ニ付伏見松林院与申寺ニ而右陣ニ御帰

伏見御軍紙役ニハ 塩谷廣右衛門殿 田代宗右衛門殿 附添
壱番ニ而候ニ付 隊伏見ニ之隊 壱番隊 小隊長 藤本三郎
二番隊 小隊長 御手 半隊長 嘉右衛門 十郎右 諸隊一小隊 先鋒二小隊 先鋒
一小隊我 大砲隊 半座ニ付時ニ 巡邏 相勤候筆ハ伏見
於柳院ニ而相越し申候 翌日ハ 正月元旦ニ而ニ

右翌年正月十日ノ書翰ナレドモ抜抄シテ此ニ載セ置也

一 正親町三条家より先般之様 正親町様より薩州長土藝
州兵隊人数調練来ル廿七日巳之刻 日之御門様前ニ而遂
叡覧候ニ付仰付候ニ付 人数不調ニ而上京不致候処
ニ付此度罷出候様被仰付候ニ付 右人数引揚
叡覧之事ニ付候ニ付手配之人数其より取り縁ニ而
達し候所同時ニ付候故 砲発不致候ニ付人数動揺之
事ニ付砲発無之様致候事
卯十二月廿五日
一 明朝辰ノ時揃同半時繰出日ノ御門ノ手前相揃
但壱番弐番三番小隊ハ乾御門御固ニ而

一 日之御門穴門江

一 玉庄

一 七番隊ゟ十二番隊迄
右大隊運動

一 諸ノ番兵
右小隊運動

一 大砲隊
右運動

一 壱番二番五番六番七番八番遊撃隊二番遊撃隊

右大隊散兵操練攻撃稽古

一 要具銃鉛用意之事

一 羽織袴ニ不拘筒袖着用 右 上京之者如此
但日当 小兵者

一 調練業会来ル溜り之東之前通乾御門ゟ人数可揚

一 砲発之場所置人少候一切無之如此

十二月廿七日

右ニ付御酒肴 鰯調練人数江
御所ゟ頂戴 之但付雑之頂戴候

十二月廿四日
一 大政御執行ニ付而ハ万事御手数候
朝廷御處置被遊迄ハ御多端且重大急務之節ニ付
此迄申候之 御所請之者ニ付取繕甚廉之来
行届兼一日不可忍之次第ニ付別紙之通徳川
内府ヨリ献 御手元之儀之御確定迄此段
御所諸式等不足之儀ハ被仰聞候ハヽ申上候事
但御思召事務掛御方共ヘ人数不少可
有之候是又申候ニ而之事
右之御別紙
一 政権返上ニ付
一 開会以上ニ而御国交際之儀
於

一 朝廷條約 御應接之儀者兼而百年
御治定之上務 御談判之上ニ而も不容易儀ニ付 御
王政之御為ニ御 御廉御布令之趣ニ遵度思召（欠字又ハ）（ノ付）
兵庫開港 各國公使京地ニ御逢被成候
是迄之手續ヲ以テ萬事取扱ヒ各國公使
上京之儀ハ不相達
御沙汰之事
但 來ル十日迄 上京被仰付 御出ニ而御請之
御届ケ不相出候

十二月廿七日

一 今般 御沙汰之趣ニ付 兵庫一件之儀 慶喜ヘ申傳
候處謹而承候旨申出候 依之東下申上候
十二月
尾張大納言
越前宰相
右大阪表慶喜ヘ御請書差出候ニ付御届書
尾張大納言
越前宰相
一
一 兵庫御開港之儀 徳川内府急度行届候

被仰付候事ニ候、被
思召ニ従ひ候事件上京有之上ハ勿論
之儀ニ付上参　朝御所様ニも御機嫌
私共筆者上京之上今般帰国之段下ヶ度所
無之候　上京之節御錠定之通被遊候ニ付
先ツ此段為御承知申上候

正月三日

河内守事
尾張大納言
越前大蔵大輔

当番所附役
勝田市郎
御金方
堀勘右衛門
手形本役
川崎四郎左衛門
右同
堤彦太郎
御進物蔵手伝
右之人

右同
柴山良助
御目付役
児玉雄一郎
右同
御進物蔵役人
山本辰次郎
下辰勇右衛門
御郡奉行足軽
八人

右之通見立通達候　御付無之候減少申付置
次第出来候御仰付候段御承知有之御屋敷ニ可申
可申事
御山本辰次郎　堤彦太郎右両人共義者此節

定府御国詰引越一列之もの之新番之者
候事
右ハ十二月廿日 一同御目見相済候処
右通リ江戸出立致候処残ル十二月廿五日御用召
押寄火之掛切合 申之付 右人数生死之程
未不分 候事

一 東條七之丞 橋本彦三郎 入江鶴之丞 福島才之進
高塚八郎 新原健之進 臼井猶吾 郡司直助
川崎四郎左衛門 中津納治 堤彦太郎 中島七郎
渋谷新蔵 前田源兵衛 半田源太郎 数司慶十郎
山本辰次郎 相川惣兵衛 齋藤真次郎 小林万蔵
玉造周司 高森利兵衛 宗山甚助 坂谷半兵衛
比野友吉 相川惣蔵 児玉佐兵衛 赤塚三郎左衛門
宇都武左衛門 前倉武一 内田清吉 八木半左衛門
橋山弥次郎 柳瀬半助 中武次左衛門 北野乙吉
岩本幸兵衛 深瀬尭蔵 田中金次郎 関 助之進
同 玉次郎 安孫武八 紫山良助 松田善次郎

堀勘左衛門　児玉孫右衛門　相田勇吉　津太郎右衛門
村上織之進　川口源蔵　烏飼八郎妻　子共弐人　女壱人
中乃條七人　玉虫七太郎　廣合恕太郎　廣合金蔵
北村條完　吉田半蔵　子野吉太　飯嶋多十郎
中村清之進　甫服源八郎
右之族江戸ニ而捕　大蔵宇和島屋敷ニ　徳川多門迄
右之外ニも　黒川覚太郎　宇府　指紙之事

於江戸生捕之逆賊人数　一周司八

玉虫周司　桑山嘉助　烏飼利左衛門　一坂谷　坂谷半左衛門
吉川忠之衛　相川惣蔵　比野友吉　児玉信之衛門
小森万蔵　赤塚完郎右衛門　前倉武一　宇都武右衛門
八木平右衛門　野田清吉　橋本條次郎　一枝　柳瀬半助
中銭次右衛門　比野乙吉　岩元孝之衛　源瀬覚蔵
前田源之衛　渋谷錦治　田中平次郎　冥助之進
東口七之進　烏飼八郎妻　折田勇吉　川口源次郎
村岡誠之進　子共弐人　女壱人　中乃條之人
玉虫七太郎　廣合條次郎　廣合金作　花崎錦蔵
北村條完　吉田半蔵　子野吉太　飯嶋多十郎

中村清之進　勇飯源八郎（朱：弥）　森万蔵　郡司慶次郎

御留守居附役
柴山良介　児玉孫右衛門　堀錦之助　沢五郎右衛門

松田善次郎（森ノ）　奥小姓 入江駒之進　関玉次郎　橋本彦三郎

高森八郎　福原才之丞　新原建之進　臼井権吾

郡司権吾　那須湊助　御留守居附役 川崎平右衛門　中津納作

堤彦三郎　半田彦平郎（源五郎）　中嶋彦平郎　山本良次郎

高森幸次郎　安藤武八

右於江戸召捕　大坂宇和島屋敷ニ　鍛冶川ニ而召捕候

従是諸生　五川覚之助宗於識ニ而

藤堂和泉守様
御留守居　藤井只之助

右去ル十二日内田仲之助ニ差越去ル七日於江戸稲葉
美濃守様江戸御留守居呼出薩州佐土原両屋敷ニ
預ケ置候男女百六拾人余御仕置ニ付召捕及乳取越
右之者共富之廉ニ関係無之者ニ付夫々御預ケ中間之国
ニ付薩州ニ引渡方取計呉候様依頼之趣ニ而就勢州より
船ニ而送遣候様于今取計之由ニ付而江戸より申来
候ニ付右申合之様被仰渡候旨申上ル事

丹羽様御役

渋谷様　同 龍見　同 龍起　渋谷八十八

宇都武右衛門　八木平太郎　同善八郎　柳瀬半助
比野乙吉　源瀬幸蔵　安彦武八　折田善次郎
川口源次郎　村尾誠之進　川口源蔵　前田勇蔵
篠崎彦十郎家来
久保当助
坂本彦右衛門家来
中村新助
氷戸検校頼
幸山喜助　堀勘兵衛　児玉源右衛門　佐太郎右衛門
東口七之丞　入江駒之丞　臼井彦吉　川崎四郎右衛門
堤彦九郎　半田源太郎　山元辰次郎　玉置周次
玉置健蔵　小野市吉　彦金武一　関助之丞
島彦季記　同喜之助　玉置七左衛門　紫山喜助
酒井右衛門　厨橋太郎　東坂源八郎

揚屋入

肥後七左衛門　右之婦人　花崎重蔵　小野半左衛門
小森荘次郎　杉原政右衛門　同子　之人　彦金藤太衛門
宇治次郎
白金宿上手下
堤作四郎　同伴之丞　堤亀太郎　二宮安八郎

徳川内府宇内之形勢を察し政権奉帰候ニ付
朝廷ニおゐて 御裁決被遊候ニ付而ハ博く天下之公議を
取偏党之私なきを以て衆心と休戚を同し 徳川祖先之
制度美事良法ハ其儘被差置御変更無之候間列藩此
聖意を体し心附候儀ハ不憚忌諱極言高論して
救絶補正ニ力を尽し 上勤王之実効を顕し 下民人
之心を安んし 皇国をして万地球中ニ冠絶せし
むる様浮励可致 御沙汰候事
別紙之通被 仰出候ニ付右之趣向々え不洩様可相達候
篤と可相心得候事
十二月廿二日

右制札ニ御掛ニ相成迄ニて制札都而御取払
相成候事
慶応三丁卯十二月 徳川内府奏聞
臣慶喜 不肖之身を以て 従来奉蒙之寵恩
恐懼感悚之至ニ奉存候 夙夜不安寝食 苦心
焦思宇内之形勢を熟察仕 政権一ニ出て万国並立之
御国威相輝候様 広く天下之公議を尽し 不朽之
御基本ヲ相立度候ニ付 微衷を祖宗ニ謝し 政権を
奉帰同心協力政律御確定ニ相成度 尚広く列藩之
見込承候(六字異本無之)議尋被建言仕候 将軍職御辞退申上候処
右ニ付慶喜上京衆議ニ決し候上ニて 是迄之通ニて御委任相成

御沙汰ニ付右等之上ハ同心戮力天下之公議輿論
を採り大公至平之御規則相立候儀と存候ニ付他念無之
鄙衷不容易感戴仕日夜企望罷在候處豈料哉
今度 臣慶喜へ 全く願来之御沙汰無之のミならず諸侯会之
列藩衆議ニも無之俄ニ一兩藩戎装を以 宮闕を立入
未曽有之大御変革被仰出候由ニ而
先帝より御依托被為在候 摂政殿下を停職し旧眷之
宮堂上方を無故擯斥被致候事 遽ニ
先帝譴責之公卿数名を抜擢し陪臣之輩猥ニ
玉座近く徘徊いたし数千年来之朝典を汚し
其余之御所置柄兼候へ共被仰出候 御沙汰之趣ニ候へ共

悉く胥壊致し実以驚愕之至ニ奉存候假令聖断ニ
出候共御為ニ不相成事ハ忠諫仕候況当今御幼沖之
君ニ在てハ殊更之事柄右様之次第ニ立至り候ハヽ天下之乱
階を為し民之塗炭眼前ニ迫り候儀ニ而歎ケ敷顧ミも
不相成金甌無闕之 皇統も如何可相成哉と恐懼仕候
痛 臣慶喜 自分之深憂此事ニ御座候殊ニ外国交際之
儀ハ 皇國一體ニ関係仕候不容易事件ニ付前件之如
き 聖明を矯め一時之小見を以 御所置被為在候而ハ
御信義を失ひ候而ハ 皇國之大害を醸出可仕候
必然之事ニ付深憂莫大之寔ニ
聖慮ニ相戻り候ハ 御沙汰ニ従ひ天下之公論ニ決し

追々差支之通厚被取計候 鄙衷之趣 御関東江者
盛下無之事ニ付通 公明正大ニ御遂ニ而 天下列藩之衆議
を以尽す之宜しく御採用を以 衆議を主として 万世不朽之御規則相
立候様奉存候 宸襟下ハ万民を安く被為在度 臣等奉
千万懇願ニ奉存候 此段謹而奏聞仕候

十二月

慶喜

伏見表狼藉者共之儀付巡邏鎮定之儀以別紙之
通候
（右文被承知候）
（御徳御別紙ニ相添此方ゟ及差上候以上）
御所江被渡候付 去ル廿一日 七ツ時分ゟ二番隊并高岡
一番隊臼砲手半隊并差出 私領或小隊之儀ニ付
差出し置候処 去ル廿二日引取 右同日
四番隊一組并差出ニ而 出張 其後罷在候
先年模様之向者何れも要害之儀兼而手当致置候首尾書
差添 此段申越候条
中将様 ……
御聴候以上
辰十二月廿八日
（辰 三月十五日）

上
島津伊勢

嶋津図書殿
桂右衛門殿
小松帯刀殿
下
川上龍衛殿
町田内膳殿

伏見表今度御変革被是迄諸之處兼し
諸藩之者横行人心不安趣相聞候ニ付急度
巡邏鎮定可有之
御沙汰候事

薩州

但
伏見市在取締之儀ハ田宮如雲ニ兼勤被
仰付候事又巡邏之儀長州土州藝州因州被
仰付候間為心得相達候事

御書附一通
但伏見表諸藩者横行巡邏鎮定之儀

右之通奥御役所ゟ切紙ヲ以下知有之候ニ付
取扱之處難計人萬事寛猶以如何候様付申
上候御手迄奉伺候処右御沙汰書之写出候様結
書之写上申候
右之通御所善之丞附役勤ニ罷出候間
出勤申候右之段此段申上候以上

慶明雜録

中将様先以御快方可被遊御座恐悦之御儀奉存候拙者爰許之義墓々敷運兼不申徳川氏鎮撫之為下阪相成候処尚更模様悪敷相成根據ヲ占候場合ニテ淀伏見邊ヱ人數ヲ操出弥不平之色ヲ顕候様子ニ被相伺候処尾州矦憤發ニ而御下阪ト申時宜ニ罷成候処越前矦杯御談合ト相見得両矦ヨリ御建言之趣被為在候間惣御参 内被成下度趣御申建ニ相成候 其節者早尾州矦ヱ八

卯十二月廿一日

内田仲之助

佐次右衛門様

御下阪御暇被下候折柄ニ御座候処又両矦ヨリ
之建言ト相成候次第御打合相成候事ト相見得
申候然處両矦ヨリ被仰立候趣ハ畢竟是迄延引
之義者御盡力不被為届処斯迄遅々罷成候義對
朝廷無申譯儀ト奉存候間此上ハ御沙汰書ヲ以
被仰達候ハヽ右ヲ以申諭其上承服不仕候ハヽ
無致方義ニ御座候間速ニ追討之命ヲ被下候ハ
ハ親藩タリ共親ヲ絶テ可打トノ言上ニ相成誠
ニ立派之御口上ニテ御座候然ルニ御沙汰ニ御
注文有之領所矢張徳川氏之モノニイタシ置御

政務ニ付而者御用途丈差出トノ趣意ニ被相伺
申候土藝此説ヲ助テ頻ニ御周旋相成候処
朝廷ニヲイテハ確乎トシテ御動不被為在候処
頻ニ歎願イタシ別紙之通之御沙汰書ニ相成申
候右之御請之有無ハ正月元日中ト期限相立候
間其内ハ相分可申此義ハ必定御受之都合ニ相
運候半被相察申候是ヨリ慶喜ヲ議定ニ引出シ
何ト歟策ヲ廻シ候半歟ト大ニ苦心仕候事ニ御
座候乍然五卿方モ昨日御着京相成余程
朝廷ニヲイテモ力付候譯ニ御座候間後藤之奸

策モ被行申間敷ト奉存候此度コソ　朝威光
輝不仕候而者不相濟時ニ御坐候間偏ニ渇望仕
居候人心之歸向者誠ニ奇妙ナルモノニテ
王政ヲ願候義ニ御座候紀州矦モ上阪相成居候
処是モ勤　王ヲ始掛勤幕巨魁田中善一郎ヲ
誅戮シ其餘五六人擯斥シ京都ニ相詰居候三浦
休太郎ト申者モ打下シ國論余程相變シ此上ハ
實行ヲ擧テ衆人之疑惑ヲ晴スト之論ニ而大阪
ヨリ御暇ニ相成候処
朝廷ヨリ御免相成總体大阪御引拂ニ相成申候

是ハ德川氏ニヲイテハ余程之痛ト被察申候彦
根藩ニヲイテモ是迄幽閉被致候人被召出正論
被相行候摸樣ニ而國中モ半方ハ勤　王論ニ
相變シ是以始掛候義ニ御座候備前ハ確乎トシ
テ正論相居リ君公此廿四日御發足ト申譯ニ御
坐候処只今御登相成候而者尾州越州之論ニ説
込ラレ候半トノ伊木長門抔議論相起暫
上京ハ御見合相成候而事有ル日ニ至リ
王事ニ勤勞イタシ候樣　朝廷ヨリ御達相成
申候因州抔モ段々勤　王説ヲ唱ヘ出シソロ

ソエ直挑勢ニ御坐候近畿之小藩ハ多クハ歸向
仕候勢ニ相見ヘ申候土州之論勤幕歟勤
王歟譯分リ不申候肥後之溝口孤雲津田山三郎
并高﨑左京此三人ハ参與戸田大和守ハ議定ニ
被仰付候儀容堂侯ヨリ御建言相成訳ニ而参與
ニハ御聞セナク議定斗ニ而被相決候様御申建
等一様相運候義ニ御座候高﨑丈ケハ太守様
エ御尋ト申譯ニ相成候故御断ニ相成一人丈ハ
御殘外ハ皆被仰付申候肥後之論是迄トハ大ニ
相違候趣ニ被相聞候得トモ全ク反正之者ニハ

無之候処悉後藤之論ニ説込ラレ同論之味方ヲ
駆出候手段ト相見得申候乍然追々長人モ出来
五卿方モ御著相成候故少シハ後藤モ落膽可致
事ト相考申候國中ニヲイテハ一人モ後藤エ服
シ候者モ無之乾等エ寄リ正論ヲ立候者ニテ御
座候得共全体臆病者故戦ヲ恐レ奸策ヲ施シ候
次第残懐之仕合ニ御坐候御苦察可被下候桂大
夫小松大夫御両人共御召シニ相成御両人ナカ
ラ御登相成候得者御國元之所不相済義ト奉存
候小松家早々御登相成桂家ニハ御見合相成候

方冝敷ハ有御座間敷哉御壹人御上京之上右邊之処宜敷御願相成候ハヽ　朝廷之処ハ如何樣共被成方者可有御座ト奉存候イツレ桂家ニハ御國元ヱ不被為在候而者相濟申間敷ト奉存候全体　朝廷ヨリ之御召之譯ニハ御座候得共國ヲ以被為盡力候モノナレハイツレ國之本堅不相立候而者被為濟間敷ト奉存候付宜敷御周旋可被下候　朝廷向之処ハ如何樣共盡力可仕候付其段者御含可被下候細大詳成ハ大久保ヨリ可申上候付文略仕候當分ハ晝夜寸暇無之

朝議ハ毎徹夜中ニ難義之次第ニ御座候少シ道カ付候ハヽ御暇仕候而罷下度御座候得共一向基取不申苦心此事ニ御坐候冝御察可被下候恐恐謹言

卯十二月廿八日　西郷吉之助

蓑田傳兵衛殿

追而昨日土藝薩長四藩之調練

叡覧ニ相成冥加至極難有次第ニ御坐候

日御門前ニ而御座候

一一翰拜呈嚴寒之砌乍恐
中将様益御機嫌克被為遊御坐恐悦奉存候於
御當地
太守様御同然被為遊御座御同慶奉存候次ニ
貴所様ニも弥御安康被成御奉務奉欣然候陳
ハ去ル九日
朝廷大御變革十二日迄之形情略申上置候通
ニ而者其后之模様別紙ニ相綴差上候徳川氏

修史局

為鎮撫下阪未
朝命奉戴之實行舉リ不申候尾越両公御周旋
之処正月元日之期日ニ御座候間夫迄ニ結約
相分可申候外國江徳川氏ヨリ返詞之書面等
一見イタシ候得者中々恭順之趣意相見得不
申真實　朝命ヲ奉返正ニイタリ候事ハ無
覺束被存申候乍然尾越土公之御趣意ハ是非
軽粧ヲ以徳川氏ヲ上京セシメ両事件御受之
奏聞ヲナサシムルトノ御見込ニ而此節御達
之御文面モ尾越之御願通　朝廷ヨリ被相

下候間必定上京与申場ニハ相成候半ト被伺
候　朝命通無異儀御受ニ相成候得者重疊
ノ事候得共旁熟觀仕候得者意底不可測候得
者必安心難仕事ニ御座候因ヨリ會桑歸國等
之一事モ有之無事ニハ治リ相付間敷カト愚
考仕候　朝廷之処岩倉公御一人ニ而餘ハ
不足取實ニ心痛之次第御座候処三條卿御上
京相成大ニカヲ得候事ニ御座候是ニハ
朝廷一層ノ御氣力相増御同應此事ニ御坐候
勤　王之藩モ段々相起リ戦ニ相成候而モ

朝廷御兵力ハ十分ニ而決而懸念無御座候外
國之処モモサトーエ寺島ヨリ引合セ彼之口氣
モ舊幕ヲ助ケ候儀者無御坐候六日ニ相成候
而者下一同之人心今般德川氏不低之所為ヲ
惡ミ候様相成大幸之至御坐候兎角給局之次
第ハ追々可申上候平運丸就開帆別紙二冊相
添大畧之形行申上候奉達御聽候儀可然御
取計可被下候御伺旁公私取交草々如此御坐
候頓首
十二月廿八日　大久保一蔵

蓑田傳兵衛殿

修史局

慶明雑録

卯十二月十二日后京師事情大略

一十二日迄ノ形勢町飛脚ヨリ申上候通ニ御座候同日尾老公二條城御登城ニテ御参　朝ニテ言上之趣両事件（辞官領地返献之事）於慶喜者謹而御内意之御趣奉拝伏候得共臣下一同沸騰イタシ鎮撫之所實ニ心痛仕候仍而尾州越前両人ヨリ　禁闕ノ下ニ於テ卿ノ事ヨリ變動ヲ生候而者乍恐　主上御幼弱殊ニ外夷相

迫リ候砌甚奉恐入候付今晩慶喜會桑ヲ引下
阪仕候右者御伺之上可取計之処大罪ハ両人
ニ引請候賦ニテ相決候トノ御事ニテ御断書
并下阪之上ハ早々鎮撫両事件許度奏
聞相成候儀ハ御受トノ御紙面二通御差出被
聞食置候与被　仰出候事
一十二日夜中徳川氏會桑ヲ引上下大勢御當地
發足下阪相成候事
一下阪之儀大ニ謀略有之華城ニ根據シ親藩譜
代ヲ語ラヒ持重ノ策ヲ以五藩ニ離間シ薩ヲ
孤立ノ勢ニナシ隠ニ　朝廷ヲ謀リ挽回セ
ントノ密計ニ候由異説紛々タリ
一十三日第一等第二等ノ大策確断シテ言上イ
タシ候様岩倉卿ヨリ於　宮中御達有之評議
之上第二等ニ決シテ及言上候事
但第一等ハ四藩ノ議論離合ニ拘ハラス薩
長ノ兵力ヲ以何ク迄モ干戈ヲ以　朝廷
ヲ奉護シ成敗ヲ天ニ任セ戦ヲ一圖ニ決ス
等ノ事第二等ハ暫ク尾越ノ周旋ヲ見徳川
氏於大阪鎮定ノ上両事件御受真ニ及正ノ

實行擧リ候ハヽ寛大ノ御處置ヲ以既往ヲ
咎メス議定職ニ而モ御採用從而公卿上於
テ攝政尹宮等ヲ除ク之外大ニ御採用其餘
列藩トイヘトモ廣ク御用ヒ氷炭相合シテ
皇國ヲ護持スル等ノ事
一右両條ハ九日一擧御定筭之通萬事
叡断ニ出テ一戰ト相成候上ハ第一等ニ出ル
ノ外無之候得ドモ八日ヨリ徹夜之
朝議ニテ九日十字比御退散相成候時宜合ニ
テ尾越藝三卿ハ其儘ノ参
朝ニテ容堂公四時比御参夫ヨリ小御所ノ衆
評トナリ越土卿大ニ徳川氏ヲ助即夜参
朝ヲ被命御許議席ニ被召加度トノ意外ノ御
大論殊更土藩後藤ナル者必死ニ是ヲ推助シ
殆ト危キニ至ル又正ノ實行挙リ候上ナラテ
ハ御採用不可然云々賢クモ太守公御建言被
為仕候尚紛々トシテ不決御勘考与ノ事ニテ
一旦御開キニ相成此間後藤ナル者頻ニ周旋
盡力ス臣等　太守公ヲ奉助碎身シテ是論破
シ一藩ヲ以漸ク是ヲ拒ヲ得終ニ尾越公両事

件　御内諭之趣ヲ奉シ徳川氏ヲシテ反正ノ
實行ヲ擧シムルノ周旋ヲ御受ト相成再度於
小御所御評議尾越卿御受之趣被遂言上タル
御都合ナリ故ニ第二等ニ出ルニ非サレハ致
方ナシ

一十四日土越卿参　朝於　小御所御評議
席華城ノ情態如何ニヤ段々附説流言被相行
物情騒然不可謂之變モ難圖候得者早々周旋
ノ功擧リ候様被思食候去々御詰詞ニテ越
卿何トモ恐入仕合ニ御座候家来者下阪為致
置候付両日中ニハ報知可有之云ニ御答ニ被
及候

一同夜後藤ヲ以岩倉卿江越公土公ヨリ御願之
越（趣）於御評議席御詰詞相成胸中如割奉存候就
右御内談申上度候付御面會申上度云々ト岩
倉卿御答ニ御決定ノ大事件一人江御内談ト
ハ御當惑ニ思食候間御断被成タシト後藤叩
頭シテ頻ニ乞不得止御面會之処越卿土卿ヨ
リ華城一條ニ付而者兎角六ヶ敷甚心痛仕候
何卒御勘考被為在　間敷ヤト岩倉卿曰ク以之

外ニ被存候既
先帝顧命ノ次第モ被為在　當今確断ヲ以被
仰出候一令ニ候ヲ鎮撫ノ不行届ヲ以被曲候
而者所謂朝令夕改ノ訣　御新政ノ今日ニ
當リ必定
皇威不振ノ基ト相成候大蔵大輔殿ニハ死決
ヲ以御受ニモ被及満　朝感伏必ス成功ノ
奏アラン事ヲ今日迄モ一同仰慕イタシタシ
候次第ニ候然ルニ不存寄　御伺ト覺候云々
ノ御答ニ閉口ノ由頻内訴百訴百端然ラハ

朝廷断然　御沙汰ノ外無ト御答候処イタ
シ方ナシトノ向ニテ引取ノ由
一十五日後藤ヨリ岩倉卿ヘ両事件御達之紙面
草稿容堂直筆ニ而相認候其趣所領之内ヲ御
用途ニ早々差出候様可仕云々此通ナラテハ
迚モ鎮撫行届不申候間是非此通ニテ御沙汰
相成候様若御採用無之候ハヽ歸國御暇之外
イタシ方ナキ趣ヲ以奉迫岩倉卿御答ニ方ニ
左様ニハ參兼候就而容堂厳儀者柱石ト
御依頼　思食候然ルニ御採用ナケレハト

テ歸國御暇ト申ニテ天下ニ面目アラハ勝手ニ可被致早々御暇可被下候御突切相成候処閉口ニテ引取亦々申出候ニハ容堂ヘ申聞候処夫ニテハ相濟不申候左様ナラハ此通奉願トテ大同小異ノ草稿持参イタシ是ヲ御内意ニハ不被存候得共御勘考ノ段御答ニ相成タル由

一十六日外國御布令一條御評議有之此方ヨリ草稿差出候モンフランノ一紙ヲ取捨シ寺島著述イタシ候御布令一條ハサトシヨリ相通候趣モ有之仍而言上相成参與一同異論無之与ノ事ニテ岩下佐次右衛門後藤象二郎ヘ外國掛迄モ被仰付候四藩議定職ヘ別段御下問モ被為在候処異存不被在トノ御答ニ相成候由

一廿日外國御布令一條御決定議定職外國掛正三卿趣之処ニ御治定被為在今日為御加判五藩被命参朝候処段々異論相立越卿ハ外國掛モ御断後藤モ同断容堂卿御建白モ有之終ニ否相行候処定徳川氏ヲ憚リ候而ノ事ト被伺候

一廿二日今日尾老卿御下阪御暇御願出何分及

遷引候段大罪一藩ニ歸候此上ハ下阪仕死生
之間ニ立御趣意貫徹是非成功ヲ奏セラレ
度トノ言上即夜願之通御暇廿五日迄ノ期日
ヲ以御紙面ニ相成ル
一廿三日尾老卿昨日御暇相成居候処今日者尾
越卿ヨリ言上ノ趣被爲在御一同御參
朝御願ニ而惣御參
内ニテ言上之趣ハ尾越卿共ニ下阪仕必死ノ
盡力仕度候付從
朝廷御沙汰之御紙面
頂戴仕度言上ハ、尤前條之通草案ヲ以御願相成

候得共別テ
朝議六ヶ敷及徹夜候
但是迄於　小御所御評議之節ハ下參與一
同列席ニテ候処此御評議ヨリ越卿土卿ヨ
リ言上之旨有之列席無之候事
一廿四日曉天退散八字比岩倉卿ヨリ被召尾越
土三卿ヨリ頻被相迫後藤從而盡力德川氏ヲ
助ケ實ニ意外ノ次第ニ候今日者何レノ筋御
決定ナクテハ不叶候間御達之御紙面ニ付不
可動之議ヲ決シ是ヲ以御受難出來候ハヽ最

早不得止候ニ付尾越周旋ハ差置　朝命ヲ
以断然可被相達趣ヲ以御押切相成候間草案
相認差上候様就　御沙汰左之通ヲ以一字
一点モ御轉削不被為在様言上差出候

一今般辞職被　聞食候付而者
朝廷辞官之例ニ倣先内大臣ト被　仰出候
事

一政権返上被　聞食候上者御政務用途之分
徳川領地之内夫々取調之上天下之公論ヲ以
返上候様可被　仰付候事

右朝議被相決御草稿被為調下参與中一同拝
見仕候様御下ケ相成候

一今日越卿尾卿御名代成瀬隼人正参　朝於
小御所御評議被為在右御文字三四字御改被
下度趣大ニ御迫リ左様候上於徳川氏奉違背
候得者迚モイタシ方無之其上ハタトヒ追討
ヲ被命候共不得止候付　朝命ノ儘可奉畏
親藩ノ義モ夫切ト存候間其段ハ御一同様ヘ
明白ニ申上置候間何卒言上通ニ被仰付度尤
廿五日ヨリ一七日ヲ限リ御受可奉申上若其

期日ヲ相迦レ候ハヽ断然　朝命ヲ以追討
ヲ被　命候共如何ニモ思召通被成下度トノ
言上ノ由
一後藤ニハ内論ヲ周旋シ言上通御文面御改被
下候上若違背仕ニヲイテハ是迄ハ色々申上
候得共徳川氏ヲ見捨候外無御座候間最早断
シテ追討ノ先鋒可奉願候尤伏見巡邏モ直様
差出可申（巡邏ノ一條ハ伏見江新撰組奉行所江入込段々横行之次第有之土藝長御固江鎮撫ノ為巡邏被仰付候処土藝御断申出候由）國元江モ乾恭助等
兵隊ヲ取寄候手筈ニ付是非奉願通御許容被
下度云々
一右ニ付岩倉卿等ハ別而御盡力ニ候得共議定
職中ニヲイテ中山卿始動キ候而勢不得止左
ノ御文面ニ相改候由
一辞職之條同
一政權返上被　聞食候上ハ御政務用途之分
徳川領地之内ヨリ夫々取調之上天下之公論
ヲ以御確定可被為在候事
右為心得相違候様　御沙汰候事
十二月廿四日

右之通御決定ニテ越卿御受尾卿ハ成瀬御受明廿五日ヨリ御下阪一七日ヲ限リ御達相成候旨下参與中江被　仰聞候事

一宇和島侯昨日御著京今日御参之事

一廿五日尾越卿御下阪之事

一廿七日五卿御著京御一同御参　朝之事

　但壬生卿御所勞ニ而御不参

一今日巳刻ヨリ於日御門前土藝長御國調練被遊　叡覧候事

　但御固人數千五百人位ニ而調練別而ヨロシク壮観不可謂

三條前大納言

宇和島少将

右議定職

東久世前少将

右上之参與

學習院儒

中沼了三

長州藩

廣澤兵助

修史局

井上聞多

右下之参與

前書之通被　仰付候　思召ニ付此

段一應　御沙汰候事

右今晩中御答御申出相成候様御下問ニ付御

存寄不被為在候旨　太守公ヨリ御答御申

出相成候事

但四藩同様御下問之事

一徳川氏下阪后鎮撫之儀ハ扱置直様伏見ヘ新

撰組并歩兵千人餘操出シ奉行所ヘ入込ミ横

行イタシ町中苦情甚敷四藩ヘ巡邏ヲ被命直

様御国人數被差出長モ同断然処徳川氏兵士

ハ奉行所ヘ相構ヘ一人モ外出不致此方人數

ハ所々宿陳ニテ對陳ノ形トナル

一廿五日凡而引拂候トノ説

一淀城内ヘ戸川伊豆守一番一連隊千二百人町

宿陳或ハ寺陳

一橋本ヘ銃兵三百人位大砲三四挺

但西融寺外二ケ寺ヘ百五十人位ツヽ十八

日夕方操込ム

一西之宮ニ歩兵五百人位
一兵庫ニ若州勢千人位
右之通所々分配シ殊ニ京師近邉迄或兵ヲ操（繰）
出シ候儀絶言語候次第也
但必定鎮撫不相調形ヲ見セ且ハ兵威ヲ示
シ壓倒セントノ意ニ出ルナラン
一紀州勤王ヲ唱候事
右者是迄尊幕ヲ主張シ候三浦久太郎津田甚
暗殺ニ逢死ニイタラスシテ歸國イタシ正議
之論相立安藤ノ類等國論ヲ威迫シ有志ノ者
ヲ舉ケラレ横井次太夫ト申者抔上京ニテ追
追面會イタシ候処隨分摸様ハ變シ候様子ニ
御座候紀州モ此節依召大阪迄出掛候処稱病
氣滞阪歸國ノ御暇願出被免候両端ニワタリ
候哉モ不被圖候得共歸國イタシ候得者徳川
氏勢ハヨホド弱リ候場合ニ御坐候
一彦根モ同様勤王ヲ唱公卿方ニ愁訴歎願
之由
一因州モ同断
右三條實行ヲ御責相成候事

一備前モ大ニ國論變　王師舉リ候得者打テ
出候迄ニ決定之由
一其餘畿内小藩等頻ニ　王事ニ勤労セン事
ヲ願出候事
一加州矦上京相成居候処九日一舉ニ而例之通
迯下リ候事
一去ル十二日九門内警衛ハ新古共ニ解兵相成
別段ニ日御門土州御臺所御門前御國南門尾
州朔平御門前藝州固メ被仰付詰中外巡邏被
仰付候事
一長州蛤御門固被仰付候事

一廿三日德山矦著廿六日參　朝之事
右之通今日迄大略之形情申上候多少之事
實紙上ニ難盡御洞察可被下候以上
十二月廿八日　大久保一藏
蓑田傳兵衛殿
此節長崎表ヨリ白山御同道兵庫迄御出張相成
御用筋之儀称寢武右衛門ニ被申含越趣致承知
候右之内白山上阪御屋敷ニ止宿之儀者両三日
相過何分可申越候間夫迄之間先只今通兵庫滞

在相成候様有之度尤大阪御屋敷ヘ致出入候儀者何モ差支無之候間左様御含ニ而御取計可有之候且外國布告一條者此内ヨリ　朝議モ相成既ニ
勅使御差立之筋ニ御内決相成拙者ニモ致下阪候様被　仰付置候処五藩連印之場ニ至リ物議相生シ何分其筋運無乍然尾越之両侯兵權差上之儀御盡力之賦ニ而一七日之期限ヲ以下阪相成今明日中ニ者何分御返詞相成候日賦ニ候間其趣ニヨリ尚布告之運相付候様取計之筈ニ候

右ニ付而者委細之事情書面ヲ以難解候間武右衞門儀爰許ニ留置右之両條決次第委細申含早早可差返候左様御納得可給候此段申越候以上

卯十二月晦日　岩下佐次右衞門

新納刑部殿

春山田中両士日記

晦日雨雪

今日大德寺内天瑞寺宿陣ノ処ニ大隊惣督島津伊勢殿ヨリ田尻務取次ヲ以　仁和寺宮御室ノ御所

付ニ被ル命サテモ我々両人於國元監軍小隊長
ノ場蒙リ命ヲ兵隊ト死生ヲ共ニシ最
君公ノ御供ニテ上京ス然ル処當地ノ形勢日々
切迫ニ相成若変事差起ラハ盡忠報國セント我
カ兵隊ト廟筭無他ノ処豈圖ンヤカヽル意外ノ
命ヲ蒙リシコト實ニ遺憾ノ至リニ不堪勿論隊
中モ不平ヲ抱キ頻リニ沸騰スレトモ我々深慮
ニ勘辨ノ訳モアリテ漸ク鎮静シ則伊勢殿ニ面
會シ演舌ノ趣有之処此節我々命ヲ蒙リシ儀ハ
不容易ノ大事日ニ差迫リ若シ其時機ニ立到リ

當時正政復古ノ始ニ勤
王ノ大王事宮ノ御危殆ノ場合ニ相成モ不被計依
之兵隊ノ内ヨリ撰挙シ斯ク命セラレタルノ由
懇ニ承知ス

一一昨廿三日明七ッ時二ノ御丸炎上折節西北
風烈敷御城内不残御焼失相成候當廿五日
天璋院様西御丸御引移被遊候処間モナク御
焼失相成又々西御丸ヨリ御立退ニ相成候様御
座候誠ニ奉恐入候且又今廿五日朝五ッ時芝

薩州御屋敷上中下共三軒外御大名様数軒ニ
而押寄取巻鉄砲打掛候処忽兵火ニ相成三屋
敷共一時ニ火事ニ相始炎中ニ而合戦有之薩
州方者四五百人程ト申事ニ御坐候多分押手
被打取候由火事者益盛ニ相成追々町家江火
移大騒動ニ而近邊之者ハ迯去候得共鉄砲等
ニ而怪我人有之様子火事ハ只今最中ニ御坐
候右ニ付俄ニ御城内者勿論御見附町家等ニ
ハ御大名様人数鉄砲大筒ニ而御固有之候今
日之騒動一方ナラス大混雑ニ而此末如何成

立候哉大心配ニ御坐候下店ニモ迯去度致居
候

卯十二月廿五日未下刻

追々御大名様人数御操[繰]出ニ相成
別紙之通堺筋砂糖屋共方ヨリ注進仕候間京
都江者早速御届申上候尤押取候由云々文言
敵[本ノマヽ]吟味之間分明分リ兼申候間相糺申候得共
江戸ヨリ申参候儘ニ御座候由且又飛脚屋近
江屋九兵衛ト申者ヨリ同様之趣申出書付者
無御坐候今日平運丸出帆仕候付不取敢此段

御届申上候以上

卯十二月卅日　　大阪　木場傳内

御家老中様

本文大阪ヨリ参候書付之由也

風説出之寫

一於二條城ニ重罪人者切捨軽者ハ放シ市中制札ナトモ都而取下ケ諸司代付與力同心ナトハ皆暇差免夫故市中乱妨不歩之事

一會ヨリ彦根江相談ニ者是迄進退者共可致契約之事故此節打破リ候付而者應救可致トノヨシ候処遂ニ依進退相互之事候得共朝命背キ候儀決而不相濟仕合共餘之儀何様トモ御同意可致トノ返答候由是ハ世間説也

慶應四年戊辰二月三日寫ス

国立公文書館
National Archives of Japan